

### 学習院大学史料館とのかかわり

平成28年(2016)、11月にパリで行われた、「辻邦生—パリの隠者」展に、私は薩摩琵琶奏者として参加させていただきました。

辻邦生先生のお父様である辻靖剛先生(1892-1981)は、薩摩琵琶奏者としてたいへん立派な先生でした。昭和34年(1959)には日本琵琶楽協会の創設に携わり、初代理事長として活躍され、現代の琵琶楽発展の礎を作った先生です。

靖剛先生のご子息である辻邦生先生は、幼少期からお父様の薩摩琵琶の音色を聴いて育ったとのこと、邦生先生の著書『銀杏散りやまず』(新潮社、1989年)には、辻家のルーツのことや、お父様の靖剛先生のこと、薩摩琵琶のことも紹介されています。



モノオペラ『銀杏散りやまず』(原作・出演:辻邦生、演出:木戸敏郎、美術:磯崎新、1994年)舞台にて  
右 辻邦生、左 辻靖剛役 須田誠舟(1947-)

辻家には靖剛先生ご愛用の古い薩摩琵琶が3面(琵琶は1面、2面と数えます)残されています。昨年、それらの琵琶は辻家から史料館へ寄贈されることとなりました。靖剛先生亡きあとはほとんど使われることがなくなってしまう琵琶ですが、少し修理する必要がありましたので、3面の琵琶を私ども石田琵琶店でお預かりし、修理・メンテナンスをさせていただきました。

当初、その琵琶をパリの展示に使う予定でしたが、琵琶には象牙で作られる部分があることから、琵琶の海外への持ち出しは、ワシントン条約に抵触するそうで、展示使用を目的とする琵琶はフランスに持ち込めないところか、パリの税関で没収の可能性もあるとのこと、残念ながらパリでの薩摩琵琶の展示は叶いませんでした。

私は、薩摩琵琶奏者としては辻靖剛先生の孫弟子にあたります。また、学習院大学の卒業ということもあり、辻家と学習院、そして薩摩琵琶とのご縁で昨年「辻邦生—パリの隠者」展にお誘いいただくことになりました。私は琵琶を扱うのが慣れておりますので、琵琶の展示スタッフ(輸送係)での参加予定でしたが、琵琶の展示計画が無くなった後も、辻展と共に行われた矢崎彦太郎氏指揮のコンサートの中で、薩摩琵琶を演奏する機会をいただき、晴れて薩摩琵琶奏者としての

参加となりました。

私が演奏するための琵琶は、何とかパリへ持ち込むことができました。琵琶奏者が自らの楽器を持ち込むことは、美術品としての琵琶を持ち込むよりも、多少ハードルが低かったように思います。万が一、パリの税関で止められた場合に備えて、パリ日本文化会館から臨時就労許可証のようなものをいただいておりますが、それを税関で見せることなく無事にフランスに入国することができました。

11月10日、パリ日本文化会館では、辻靖剛先生がよく演奏されていた琵琶歌「武蔵野」を、多くのフランスの方やフランス在住の日本人のみなさまに披露することができました。

### 日本における琵琶について

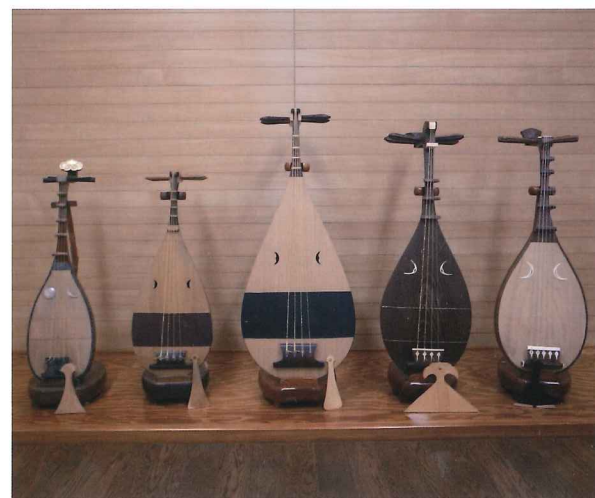
日本に古くから存在する琵琶ですが、実は外来のもので、西アジア発祥の弦楽器がそのルーツと考えられています。

西アジアで発生したリュート系の弦楽器は、インド、中国を経て、少しずつ形を変えながら、やがて琵琶となり、7世紀頃日本に伝えられました。日本に伝わる最古の琵琶は、正倉院に伝わる螺鈿紫檀五弦琵琶です。音楽の教科書などでおなじみのこの琵琶は、ヘッドの部分がまっすぐに伸びている、いわゆる「直頸」が特徴です。この琵琶は、残念ながら演奏方法が現代に伝わることなく、当時、どのように演奏されていたのか、実はよくわかっておりません。

直頸五弦琵琶の他に、日本には、ヘッドの部分が後方に90度近く曲がった琵琶、いわゆる曲頸琵琶も伝わりました。正倉院には数面の四弦曲頸琵琶が伝わっています。これらの四弦曲頸琵琶は宮中で行われる雅楽に使われ、現代にもほぼそのままの形で楽琵琶として伝わっています。

このヘッドの部分が後方に90度近く曲がった琵琶は、少しずつ形や材質、演奏スタイルを変えながら、現代まで生き延びました。

現在、日本には5種類の琵琶が存在します。



左から盲僧琵琶、平家琵琶、楽琵琶、薩摩琵琶、筑前琵琶

### 辻靖剛先生の琵琶(薩摩琵琶)について

薩摩琵琶は戦国時代より薩摩の地に伝わる琵琶で、もっぱら語り物の伴奏楽器として使われます。

今から500年ほど前、薩摩藩藩主 島津日新公忠良が若い武士のために教訓歌を作詞し、盲僧 淵脇寿長院に作曲させ、奨励したのが薩摩琵琶の起源です。

当時の薩摩領内の民衆の文教の程度は低く、また戦乱の続く世の中で、武士も領主も生活は苦しく、人々の心は荒んでしまったそうです。こうした状況を憂いた日新公は、何よりも青少年の精神教育の大切さを痛感し、仏教の教え、禅の精神、儒教の道などをわかりやすく青少年に説いてゆくために、「武蔵野」「迷悟もどき」「花の香」などの琵琶歌を自ら作詞しました。そして若い武士に琵琶を奨励しました。

後の薩摩における郷中教育では、藩内の武士の子弟は、各地域の学舎に集まり、目録流剣術によって武道を身につけ、琵琶によって志操堅固にして情操豊かな人格を養いました。

島津日新公以来、数百年の間、歌い継がれてきた薩摩琵琶は、薩摩土風に深くかかわり、武士たちの間に浸透し、やがて明治維新の大事業を成し遂げる原動力になっていきました。

明治以降は鹿児島県内にとどまらず、広く全国に普及し、明治・大正・昭和初期において全盛期を迎えます。

明治天皇は薩摩琵琶の演奏が特にお好きで、当時の薩摩琵琶の名手、西幸吉(1855-1931)による御前演奏がたびたび行われました。これにより薩摩琵琶に対する社会的な評価が上がり、人気もさらに大きなものになったそうです。

昭憲皇太后から女子学習院(当時の華族女学校)に賜った御歌、「金剛石」「水は器」は、今でも学習院女子中高等科の入学式で歌われ、学習院の女子部ではたいへん馴染み深い歌となっていますが、この御歌は、日新公から続く薩摩琵琶の教えと内容的に共感することから、薩摩琵琶でも「金剛石」として、広く歌われる有名な琵琶歌となっております。

第二次世界大戦後、薩摩琵琶は、洋楽の普及などの影響で衰退した時期もありましたが、辻靖剛先生をはじめとする琵琶の先生方の奮闘、努力によって再生復活し、現在にいたっています。

### 正倉院に伝わる螺鈿紫檀五弦琵琶の復元

正倉院には、螺鈿紫檀五弦琵琶が収蔵されています。この琵琶は、奈良時代に中国から伝来し、聖武天皇に献上され、その後正倉院に収蔵されました。この正倉院に伝わる螺鈿紫檀五弦琵琶を、石田琵琶店 四世石田不識(1937-)が復元、製作いたしました(右上写真参照)。

石田不識は自身の琵琶職人としての集大成に、かねてからこの螺鈿紫檀五弦琵琶の製作、復元を目標に掲げて参りました。平成20年(2008)ころから準備にかけ、螺鈿細工に使う貝や琥珀の収集・加工を自自行い、仕事の合間の時間に少しずつ作業をすすめ、約7



四世石田不識が復元した正倉院螺鈿紫檀五弦琵琶

年の歳月を費やして、平成26年(2014)4月に完成いたしました。

琵琶全体に施されている螺鈿細工は正倉院の琵琶の写真を参考に、ほぼ忠実に再現されており、螺鈿細工が目立っていますが、楽器として、もちろん音色にもこだわって製作しております。材料の選定や、胴体のくり抜き方、表板の厚さなど、音色に

関わる部分の製作は、細部にわたり、琵琶職人歴50年を超える経験が反映されています。

この五弦琵琶の胴体は桑製。表板には栗を用いております。正倉院の螺鈿紫檀五弦琵琶とは素材が異なりますが、現代に息づく琵琶職人が作る五弦琵琶は、単なる美術装飾品ではなく、楽器として、形、螺鈿細工、そして音色のすべてにおいてバランスの良い仕上がりとなっております。

また、今回の復元・製作事業は、今後の琵琶製作の技術伝承においても、たいへん意義の深いことでもありました。

※日仏会館の「辻邦生—パリの隠者」展では辻家の琵琶と復元正倉院螺鈿紫檀五弦琵琶も展示予定



石田克佳  
プロフィール

昭和42年(1967)生まれ。父は琵琶製作者、石田琵琶店 四世石田不識(平成18年度文化庁選定保存技術保持者)。昭和55年(1980)学習院中等科入学。平成2年(1990)学習院大学文学部国文学科卒業。

大学在籍中より琵琶製作に携わる一方で平成元年より薩摩琵琶奏者の第一人者である須田誠舟(2頁写真参照)に師事。以来、琵琶の製作者および薩摩琵琶奏者として国内外のさまざまなイベントや演奏会に参加している。薩摩琵琶正統会会員、日本琵琶楽協会会員。

東京・虎ノ門にある石田琵琶店は、創業明治11年(1878)、130年以上つづく、日本で唯一の琵琶専門店。薩摩琵琶をはじめ、平家、筑前、雅楽の琵琶全般を取り扱っている。